

【教訓】 208頁

大正天皇さまの御即位のとき、説教を聞きに行ったら講師が「何か記念事業をしないかい、学校を建てるとも、庭を築くことも、樹を植えることも、みな記念事業ではあるけれども、これらはみなけたり、流れたり、枯れたりする事業で、永遠のものではないから、永久にわが身の助かる記念事業は、信楽開発することである。一通りの聞き方では、真の喜びは出て来ない」と聞かされて、茶色の小便が出るまで求めた。

苦抜けして大満足をした後、ある僧侶に「私は二度往生があると思いますが、如何でしょうか」と尋ねたら「報土と化土の二土の往生ならあるが、人間が二度も往生してたまるものかい」

「それでも、聖人さまでも二十九歳のとき心が往生し、九十歳のときに身体が往生したのではありませんか」

「そう言えばそうだが」といわれました、と言ったが、

聖教読みの聖教読まず、聖教読まずの聖教読みという言葉があるが、大久保さんはお聖教は読まないが、八万の法蔵を讀んでいる。坊さんは体失不体失の往生がわからないのだろうか。